琉球大学学術リポジトリ

正音資料の特質

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2014-09-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 石崎, 博志, Ishizaki, Hiroshi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/29637

正音資料の特質

On the Textbooks of Correct Pronunciation (Zheng Yin) in Late Imperial China.

石 崎 博 志
ISHIZAKI Hiroshi

はじめに

清代の官話資料の分布をみると、韓国、欧州、日本、琉球などの域外資料の豊富さとは対照的に、中国国内の資料は極めて少ない。中国国内での官話の状況を知る資料としていわゆる正音資料の存在が挙げられるが、これらは中国国内の官話の状況を知る上で、多くの情報を与えてくれる。本稿では、正音と正音資料に関わる事柄をまとめ、以下の問題について論じたい。

1，“正音”という言葉の意味
2，雍正帝の言語政策
3，正音資料の範囲、種類、分類とその特徴
4，福建系正音資料と琉球系官話資料における共通性
5，漢人の官話学習

1　“正音”という語について

まず正音という語について確認する。“正音”という言葉が日本、韓国、中国においてどのような意味で用いられ、どのような語と対比して使われているかを確認し、“正音”と“官話”の違いについて論じる。

1.1　日本における“正音”という語

日本における正音(しょうおん)とは、かつて日本漢字音の漢音を指した言葉であった。持統天皇以降、漢音を正統な語音(正音)として普及させた時に、呉音に

対してこのように呼ばれた。観智院本『類聚名義抄』(鎌倉中期書写)にも「正音」として、漢音系統の語音が記されている。

また、文雄[1]は『呉漢華三音正譌』「華音」において、「正音」と「俗音」を対比させて用い、「中原の音」をもって“正音”としている。そして中原の音を「官話」と「俗話」に分け、「官話」を読書音、「俗話」を口頭で用いる音としている。

『三音正譌』「華音」「華音者俗所謂唐音也。其音多品。今長崎舌人家所学有官話杭州福州漳州不同。彼邦輿地広大。四方中国音不斉。中原為正音亦謂之雅音。四辺為俗音亦謂之郷音。其中原所用之音有二類。官話与俗話也。俗話者平常言語音也。官話者読書音此之用。其官話亦有二。一立四聲唯更全濁為清音者是。一不立入聲不立濁聲唯平上去唯清音者。謂之中州韻用歌曲音。二種通称中原雅音支那人以為正音。其俗話者杭州音也。亦曰浙江音。」

1.2 韓国における“正音”という語

一方、韓国では『訓民正音』(1446)、『華東正音通釋韻考』(1747)、『春秋正音』(1734)、『經書正音』[2](1735)、『中華正音』(1883)[3]などの書名に“正音”の語が使われ、いずれも「正しい字音」、「標準音」の意味をもつ。このうち『華東正音通釋韻考』は“正音”に対して“俗音”を対比させている。これらのうち『中華正音』のみ、漢語の運用能力を高める目的で編纂された教科書であり、それ以外は韓国語の漢字音や、経書を音読する際の読書音をハングルで記したものである。

1.3 中国における“正音”という語

1.3.1. 雅な音楽の音色

---

1 文雄(「もんのう」あるいは「ぶんゆう」1700－1763) 江戸時代中期の浄土宗の學僧・音韻学者。俗姓中西、字は豁然、号は無相・尚絅堂・蓮社。江戸の伝通院でまなぶかたわら、太宰春台について中国音を研究。著書に『磨光韻鏡』『和字大観抄』『韻鏡律正』がある。

2 經書正音(木活字本, 大學正音, 孟子正音, 書伝正音, 詩經正音, 中庸正音)は、經書の漢字の下にハングルで左右両音を付す。1747 年:華東正音通釋韻考, 松江歌詞(星州本)などもある。

3 更科慎一(2005)、竹越孝(2009)、朴在淵(2010)参照。

前漢・劉安『淮南子』では、雅な音楽の音色という意味で使われている。

『淮南子·天文訓』: “徵生宮，宮生商，商生羽，羽生角，角生姑洗，姑洗生應鍾，比于正音，故為和。應鍾生蕤賓，不比正音，故為繆。”

正しい音楽の音という意味では、前漢から清代まで用例がみられ[4]、明・朱権『太和正音譜』などのように、曲韻書にも“正音”の語が使われている。

また、広東省では“正字戯”あるいは“正音戯”という歌う劇があり、明の宣徳年間(1426-1435)には正字戯が広東省で流行したことが、1975 年に潮安で出土した『劉希必金釵記』の存在によって明らかになっている[5]。また、明の萬暦年間(1573-1619)には、福建でも“官音”によって歌われる戯曲があったことが記録されている[6]。ただ、ここで言われる“官音”、あるいは南戯に属する“正字戯”あるいは“正音戯”における“正音”が、メロディを指すのか、言葉の違いを示しているのかは、議論の余地があるだろう。

さらに、清・道光『重纂福建通史』巻五十七「風俗」には方言で歌った戯曲に対して、“正音”で歌った戯曲があることが示されている。

「聞之閩歌，有以鄉音歌者，有學正音歌者。 夫謳歌，小技也，尚習正音，況學書乎。」

1.3.2. 字の本来の音

清代考証学においては、借讀や転讀(転音)と区別[7]した、漢字本来の音の意味で“正音”の語が使われる。

・清・錢大昕『潜研堂文集』「答問九」「凡字有正音有轉音，‘近’既从斤，当以其隱切爲正其讀。如几者，轉音，非正音也。」

---

[4] 南朝梁・劉勰『文心雕龍・樂府』: “迩及元成，稍廣淫樂，正音乖俗，其難也如此。”
明・朱載堉『樂律全書・吹律』: “雖然，善吹律者亦豈容易學哉？蓋須凝神調息，絕諸念慮，心安志定，与道潜符而后启脣，少許吐微气以吹之，令气悠悠入於管中，則其正音乃發。”
清・楊復吉『夢闌瑣筆・五女墓』: “瑶華多才，爲上山担柴之謡，四女和之，声動路人。好事者以正音叶之。”

[5] 劉懐堂(2009)参照。

[6] 福建省戯曲研究所(1983:42-43)参照。

[7] 宋・王讜『唐語林· 文學』: “書之難，不唯句度義理，兼在知字之正音、借音。”

同書「『说文』读若之例，或取正音，或取转音。」

1.3.3. 語音を矯正する[8]

“正音”という語を、語音を矯正するという意味で使う例も多く、これは現代語で比較的多い用法である。また、香港をはじめとする広東語圏においては1970年代から現在まで“粤語正音運動”として、粤語の発音を正しく矯正する運動が起きている。

・『字學元元』「惟人不知切韻，是以有訛讀。惟有訛讀,愈以不知切韻。故正音者，相沿之訛所当正也。」

・『正音新纂』「自序」「正音為正語言文字之聲也。顧聲音之別有二。一官音，一土音。官音如南北二京音者是，土音如土俗及外地纖巧油滑之音者是。但無論官音，土音究不外乎先當察考音之所以然。」

1.3.4. 正しい発音、標準の語音[9]

清代の「正音書」においても、以下のように、欽定の韻書の音系に基づく定義がされている。

・『正音咀華』「十問」「何為正音。答曰遵依欽定『字典』『音韻闡微』之字音即正音也。何為南音。答曰古在江南建都即以江南省話為南音。何為北音。答曰今在燕建都即以北京城話為北音。」

・『正音切韻指掌』凡例第十条「此書以『中州韻』為底本、而参之以『中原韻』、『洪武正韻』、更探討于『詩韻輯略』『五車韻瑞』『韻府群玉』『五音篇海』『南北音辨』『康熙字典』『音韻闡微』諸書。」

この他に「正しい発音」という意味での“正音”は、明代の劉鑑『經史正音切

---

8 『南史・胡谐之傳』:“上…以諧之家人語傒音不正，乃遣宮四五人往諧之家教子女語。二年后，帝問曰：‘卿家人語音已正未？’諧之答曰：‘宮人少，臣家人多，非惟不能得正音，遂使宮人頓成傒语。’”
清・ 李漁『閑情偶寄・声容・習技』:“正音維何？察其所生之地，禁爲鄉土之言，使歸中原音韻之正者是已。

9 清・侯方域『徐作霖張謂傳』:“(張謂)舌短，無正音。”

韻指南』、清代の宗常『切韻正音經緯圖』に代表されるように、等韻学などの書名に使われている[10]。等韻書においては専ら“正音”の語が使用され、“官話”の語が使われる例は見当たらない。そこには書面語における正しい発音、あるいは欽定韻書に反映された平水韻の系統を指すことも多い[11]。清人にとって「正しさ」を保証するものは、古くからの伝統に基づいている音だったと考えられる。これは前節で述べた“正音”の意味とも相通じるものである。

「正しい音」という意味での“正音”は、普通話の成立後にも引き継がれ、周祖謨(1956)、高名凱・劉正埮(1956)にあるように、“正音”が標準音の意味として使われ、定着する。

1.3.5. 官音

『學政全書』など正音書館(正音書院)に関して記述した檔案資料では、“官音”の語を使用している。

『學政全書』卷五十九

「又議准：閩省士民不諳官音，雍正七年間，于省城四門設立正音書館，教導官音。但通省士民甚多，一館之內僅可容十餘人，正音固難遍及。況教習多年，鄉音仍舊，更覺有名無實。」

また徐珂『清稗類鈔』「教育類」「正音書院」の条には以下のようにある。

「閩中群縣皆有正音書院，即為教授官音之地。」

正音書院は“官音”を教えるための場所であることを示し、“官音”に対して“鄉音”を対比させている。だが、“官音”が示すのは、福建・広東の地における方言

---

10 耿振生(1992:123)「“正音”这个詞，在近代等韻學中常見，它的出現頻率比“官話”要高得多。鄧韻學家所說的“正音”就是理論上的標準音，語言的最高規範。」

11 耿振生(1992:120)「統治者所關心的是書面語的“正音”，这个正音是宋代平水韻的語音系統，明朝開國皇帝朱元璋下令纂修的『洪武正韻』最後也没有取代平水韻的地位，清代官修韻書『佩文書韻』『音韻闡微』都是平水韻的本格局編撰的。」同書(p.122)「另外，讀書人尤其是等韻作者不僅對官話語音系統的認識有分歧，而且他們著書時作重視的是所謂“正音”，而不是官話。」

読書音なのか、それらを超越した読書音体系なのか、口語音なのかといった具体的内実は不明である。

因みに福建および福建と交流のあった琉球では、“正音”あるいは“官話”を“官音”とよぶ例が比較的多い。蔡奭『新刻官音彙解釋義音註』官音彙解釋義序では、“夫官音者、天下之正音也。”とかかれ、さらに琉球王国の外交文書集である『歴代寶案』では主に“官音”の語が使用されている[12]。

1.3.6. 官話

中国の文献で“正音”を“官話”と定義づけたものは意外に少ない。それも以下にみるように“俗所謂”とかかれ、官話は正音よりもやや卑俗であることを感じさせる表現で説明されている。

・高静亭『正音撮要』「正音集句序」「正音者俗所謂官話也。」

また、同書の千字文の各字に反切を付した「正音千字文集類」では、以下のように述べる。

「所註切音必須以正音切之。若以土音切則不俏官話音韻矣」

ここでは、反切は「正しい音」で読まなければならず、もし土音(方言)で反切を読めば、官話の音に似なくなってしまうことが述べられている。つまり、漢字を“正音”で読むことで、“官話”の音が実現できるとしている。

また、直接正音の語を説明したものではないが、清・俞正燮『癸巳存稿』(1833)「官話」では、雍正六年の上諭と正音書院について言及した箇所で“官話”の語を使っている。

“雍正六年，奉旨以福建、廣東人多不諳官話，著地方官訓導，廷臣議以八年爲限，挙人、生員、貢、監、童生不諳官話者，不准送試。”

十九世紀には漢人にとって“官話”という語を使う許容度がかなり大きくなっていたと考えられる。

---

12 琉球方要求清朝(福建)方通事的条件，即「通暁夷語官音」的人。『歴代寶案』里使用「官音」词如下。『歴代寶案』二-一一二-〇八(台湾本 5214 以下)、同書二-一一九-〇八(台湾本 5393 页以下)、同書二-一四三-〇七(台湾本 5968-5969)、同書二-一八五-十四(台湾本 7613)。

1.3.7. 正音と官話

では、中国国内において“正音”と“官話”はどのような語感をもつ言葉だったのだろうか。

“官話”という言葉の初出は中国ではない。李朝の『成宗賓録』十四年(1483 年)九月己未の条に初めて出現するとされる[13]。中国の資料では何良俊(1495-1575)『四友齋叢説』巻十五に見える例がふるく、晩くとも嘉靖年間(1522-1566)までに“官話”という語が一般的に定着していた[14]。また、“官話”という言葉は、地域によりそれが指し示す範囲が異なる場合もある[15]。明代には下層の商人や遊女などの地域を移動する者たちが話す言葉として使われる用例もみられる[16]。

言葉としては“正音”は“官話”より古い。清代以前には“正音”は“官話”の意味で使われず、満州人あるいは漢人が“正音”をもって“官話”と称するのは、19 世紀に入ってのことである。

また、官話学習教材の書名においても、“官話”という言葉は中国国内では殆ど用いられず、正音資料で“官話”の語を書名に冠したものは『新刻官話彙解便覧』のみである。だが、これももとは「官音彙解」と称したもので、『新刻官話彙解便覧』のなかでも「官話彙解小引」においては官音”の語が使用され、同書の改訂版である『較正官音仕途必需雅俗便覧』では“官話”の語は再び“官音”に改められている。

ここまで“正音”という言葉の変遷について論じてきたが、正音資料が事実上“官話”の習得を意識した資料群であることを否定するものではない[17]。だが、“正

---

13 平田昌司(2001)、王維輝(2010)、竹越孝(2013)参照。

14 明・何良俊 『四友齋叢説・史十一』:“雅宜不喜作鄉語，每發口必官話。”
明・謝榛『四溟詩話』巻三:“及登甲科，学説官話，便作腔子，昂然非復在家之時。”
冰心『我的学生』:“一个月以后，她每星期只消来两次，而且每次都是用純纯粹的流利的官話，和我交談。”

15 王力(1926)「濁音上聲變化說」: “廣西的話可以分為官話、非官話两種。大概廣西北部說的是官話，而南部說的是非官話。說非官話的人便要學官話，以便將來見官或作官。所謂官話，是以桂林話為標準的。古人云: ‘北以北京為宗，南以桂林為正’，故又謂之正音。

16 木津祐子(2008a)、(2008b)参照。

17 『學政全書』などでは正音書館関連の記事で“官話”の語もよく使用されている。

音”と“官話”は、漢人の意識において雅／俗、読書音／口語音、抽象的／具体的、理想的／現実的といった対立の上に、一定のニュアンスの違いがあったことは確かなようである。一方、語音の伝統にとらわれぬ漢人以外の学習者にとっては、現実の口語の意味を備える“官話”という語を使用することに躊躇がなかったのかも知れない。

2　雍正帝の言語政策

雍正帝の治世に行われた各種の言語の政策は、のちの官話普及にとって重要な転換点であったと言えよう。まず、下に列挙する雍正帝の言語政策について確認してみよう。

・雍正二年(1724)：『聖諭廣訓』頒布開始
・雍正四年(1726)：『音韻闡微』成書、六年発行
・雍正六年(1728)：正音の上諭
・雍正七年(1929)：西洋學館の設立[18]

2.1『聖諭廣訓』[19]

『聖諭廣訓』とは、清朝の康熙帝の聖諭十六条を雍正帝が敷衍した一種の教育勅語である。父母に対する孝養，近隣との和睦，異端思想の排除など，支配者が人民に要求する儒教的な実践倫理をわかりやすく説いている。この宣伝と普及のために，地域ごとに講約が設けられ、毎月 1 日と 15 日に講義が行われた。また学生の試験の際にも，暗記筆写が義務づけられた。

のち口語を意識した『聖諭廣訓』の白話本が陸続と出版され、宣講の時に用いられた。そのうち王又樸『聖諭廣訓衍』と道光三十年敕頒された『聖諭廣訓直解』はもっとも有名である。これらはのちに、宣教師が官話を学ぶ際にも採

---

18 雍正七年（1729 年）十月，内務府が雍正帝の上諭に基づき、“西洋学館”を設立し、西洋語の翻訳者の育成を図った。雍正皇帝的上諭：“雍正七軍十月内，恰賢親王傳旨：内務府官員人等子弟内，有情愿學習西洋人字、語者，揀選十数人，着西洋人巴多明等教習西洋拉的諾字、話。其日用飯食，照依咸安宮官学生之例結與。”

19 『大清会典』「雍正二年，御制『聖諭廣訓』萬言，頒發直省督撫學臣，轉行該地方文武各官暨教職衙門，曉諭軍民生童人等，通行講讀。」

用される[20]。

2.2『音韻闡微』[21]

雍正帝が上諭を発する同年、1728年に清・李光地『音韻闡微』が上梓されている。明の洪武三年（1370)から乾隆二十二年(1758)は科挙における詩賦試験の空白期間で、『音韻闡微』の発行時は、科挙進士科において詩の試験は行われていなかった。この韻書は平水韻を基準としているが、その翌年の上諭との関連を考えると、『音韻闡微』は詩の押韻規範を打ち出したというよりは、読書音の規範(正音)を提示したものである可能性が高い。

この韻書の最大の特徴は反切の「改良」にある。例えば、“公：姑翁切”、“巾：基音切”といったように、反切上字に“支”、“微”、“魚”、“虞”、“歌”、“麻”など入声韻尾や鼻音韻尾を含まない漢字を選び、反切下字には影母など零声母字を使うことを原則とする。この方法は満文十二字頭の発想に由来し、漢字をより音標文字に近い方法で使用している。ただ改良されたとはいえ、この反切作法はやや厳密さに欠けるが[22]、反切作法はそもそも曖昧な読書音の基準を打ち出すには十分な精度だったと思われる。こうした反切法は、反切上字や反切下字が特定の漢字に固定化されるなどの変更が加えられ、『正音咀華』『正音切韻指掌』などにも応用される。

2.3 雍正六年の上諭

前節で触れたようにすでに明代には「官話」という言葉が存在しているが、口頭言語を音声・文法・文体面で統一し、全国に普及させようという試みは当時はなされていなかった。中国国内において、話し言葉を統一化する動きが明確に打ち出されたのは清朝に入ってからで、具体的には雍正六年(1728)の上諭からである。以下にそれを引用しよう。

『雍正實録』「巻七十二」、雍正六年八月甲申“諭内閣。官員有蒞民之責。其語

---

20 廖振旺(2008)参照。
21 また同年『廣解聖諭廣訓』王又樸序が書かれている。
22 中村雅之(2010)参照。

言必使人人共曉。然後可以通達民情。而辦理無誤。是以古者六書之製。必使諧聲會意。嫻習語音。所以成遵道之風。著同文之治也。朕每引見大小臣工。凡陳奏履歷之時。惟有福建廣東兩省之人。仍係鄉音。不可通曉。伏伊等以見登仕籍之人。經赴部縯禮之後。其敷奏對揚。尚有不可通曉之語。則赴任他省。又安能于宣讀訓諭、審斷詞訟、皆歷歷清楚。使小民共知而共解乎。官民上下。語言不通。必致吏胥從中代為傳述。于是添飾假藉。百弊叢生。而事理之貽誤者多矣。且此兩省之人。其語言既皆不可通曉。不但伊等歷任他省、不能深悉下民之情。即伊等身為編氓、亦必不能明白官長之意。是上下之情、捍格不通。其為不便實甚。但語言自幼習成。驟難改易。必徐加訓導。庶幾歷久可通。應令福建廣東兩省督撫、轉飭所屬各府州縣有司、及教官。遍為傳示。多方教導。務期語言明白。使人通曉。不得仍前習為鄉音。則伊等將來引見殿陛。奏對可得詳明。而齣仕他方。民情亦易于通達矣。[23]”

上諭では、“官話”や“正音”という言葉は使われていない[24]。上述の諭旨を読むと、当時の言語的困難は“陳奏履歷”、“宣讀訓諭”、“審断訴訟”にあったことがうかがえる。これらはいずれも文章を読み上げる場面である。“必使諧聲會意。嫻習語音。”とあることから、とりわけ漢字の発音を意識した記述といえよう。当時、福建・広東の地域では方言音で経書を暗記し、科挙試験に備えていた。こうした方言による読書習慣が、任官後、文章を読み上げる際に方言音を露呈する状況をつくり出していたものと思われる。上諭の最終的な目的が、福建方言・広東方言を母方言とする者たちが「官話」を話すことにあったとしても、当面は

23「官員は人民に接する責任を負っているのであるから、話す言葉も人々に理解されるものでなければならぬ。それでこそ民情にも通じ行政も誤りなきを得るのである。....しかるに朕が大小の臣下を引見し、彼らの履歷奏上を聞くたびに、福建・廣東兩省のもののみはなお方言が抜けず、言っていることが解らぬ。.... これでは他省の任地に赴いても、訓諭を宣讀し、訴訟を審斷するのに、どうして人民たちに分かり易く明瞭に理解させることができようか。官民上下のあいだに言葉が通じなければ、かならずや胥吏の通譯をまたねばならぬ。さすれば言葉を飾り言い替えをなすなど、百害の生ずることになり、事の誤りを招くことは多いに違いない。」平田昌司(2001)参照。

24 雍正六年の上諭について記した清・兪正燮『癸巳存稿』「官話」は、上諭の内容を要約したものであり、上諭の原文には“官話”の語は使われていない。

“郷音”による読書習慣を矯正することを企図していたと思われる[25]。

だがその後、この上諭は10年もしないうちに有名無実化する。当初は科挙に合格しても官話を習得しない者は任官させない方針を打ち出すが、以下のように官話習得年限は次第に長くなり、最後には期限の定めはなくなる[26]。

雍正六年(1728)：福建8年、広東8年
雍正十二年(1734)：福建12年、広東8年
乾隆元年(1736)：福建12年、広東11年
乾隆二年(1737)～：福建、広東期限なし。

事実、少なくとも広東省においては、上諭以後一世紀あまりの間、殆ど口頭言語の能力は向上していなかったようである。それは以下のRobert Thomの言葉にも表れている。

「康熙帝があの勅旨を発布して以来、すでに1世紀あまり経ってしまった。しかし我々はこれまでに何ひとつ変化を感じることができない[27]。」

2.4 雍正帝の言語政策に対する評価

雍正帝の言語政策はその後の歴史をみると重要なものだったと評価できる。『聖諭廣訓』や『清文啓蒙』などに端を発するテキストが、宣教師の漢語教科書に利用されていることがその証左である。しかし、雍正帝の治世においては成功したとは言いがたい。正音資料についても、それが本格的に出版されたのは雍正六年の上諭から100年以上経過した19世紀に入ってからである。特に広東省での正音資料の相次ぐ出版は、雍正帝の施策の直接的効果ではなく、当該地区における他地域からの人口の流入や社会的変化、交通の発達による経済的

---

25 陳谷嘉(1997:528)所引の『永春縣志』巻十三「学校」によると福建省・永春の正音教員は、浙江省仙居縣から貢生が派遣されている。
26 陳谷嘉(1997:529)、片山兵衛(1978:57)参照。
27 Robert Thom(羅伯聃)『意拾喩言』Printed at the Canton Press Office1840:viii.「康熙帝」は「雍正帝」の誤り。

要因に求められるものと思われる[28]。

3　正音資料の種類と系統

では、正音資料はどこからどこまでを含むものと考えればよいだろうか。これまで一般的には“正音”を書名に冠し、雍正帝の上諭の後から、民国までに中国で出版された“官話”習得や運用の目的を直接的に示した書物を正音資料と呼んできた。これらをひとまず狭義の正音資料とよぶが、このなかにも正音資料というよりは韻書や韻図の系列に連なる『正音通俗表』や『正音切韻指掌』、発音のみを記した『正音新纂』なども含まれている[29]。

明代にも福建人を利用対象とした『切用正音郷談雑字大全』[30]といった通俗辞書が存在し、雍正の治世に先立つ資料が存在しない訳ではない。また“正音”という語の意味や、雍正帝の言語政策全般を考えた時、『音韻闡微』や白話版『聖諭廣訓』の諸本、官話訳された『紅楼夢』なども「正音資料」に含める必要はあるかも知れない[31]。そして、清代にはいわゆる狭義の正音書以外にも数多くの発音を示した書物が出版されている。『正音通俗表』や『正音新纂』を正音書に含めるなら、旗人の年希堯によって何度も増補・改訂を繰り返した『五方元音』、その康熙年間の増補本、雍正五年刊の『五方元音大全』、嘉慶年間に趙培梓が改変した『剔弊五方元音』や、清・嘉慶10年【1805】序の李如珍『李氏音鑑』なども、正しい発音を示そうとした点では、広義の正音書に数えられよう。

以下に論じるのは狭義の正音資料についてである。

【狭義の正音資料】

雍正7年【1729】：袁一州『官語詳編』一巻

---

28 太田辰夫(1969:187)に「正音ないし北方語の普及は，交通・産業の発達など，経済面にその真の原因をもとめるべきであろう。」と述べられている。

29 巻末の「正音資料目録」を参照。

30 『美國哈佛大學哈佛燕京圖書館藏中文善本彙刊』美國哈佛大學哈佛燕京圖書館編 商務印書館/廣西師範大學出版社　2003.2、中國社會科學院歴史研究所文化室編『明代通俗日用類書集刊』第15冊,西南師範大學2011年11月所収。また、内田慶市ハーバード日記に言及あり。

31 王利器(1979)参照。

乾隆 13 年【1748】蔡奭“題識”『新刻官音彙解釋義音註』(『注釋官音彙解』)
乾隆 50 年【1785】、嘉慶庚辰【1820】刊本：張玉成『正音彙編』(『別俗正音彙編大全』)二卷
乾隆 59【1794】序：蔡奭『新刻官音彙解便覽』三卷
嘉慶 10 年【1805】刊：高靜亭『正音撮要』四卷
道光 17 年【1837】: 莎彝尊『正音辨微』六卷
咸豐 3 年【1853】刊：莎彝尊『正音咀華』三卷續編一卷
咸豐 3 年【1853】刊：莎彝尊『正音切韻指掌』一卷.
同治【1862】刊：張錫捷撰『較正官音仕途必需雅俗便覽』三卷
同治 9 年【1870】刊：潘逢禧『正音通俗表』一册.
光緒 25 年【1899】刊：江寧馬氏自序:『正音新纂』二卷

3.1 正音資料の系統

狭義の正音資料は大きく分けて広東系と福建系に大別され、広東系は版本から以下の(a)ー(c)の３系統がある。

【広東系】

(a)『官語詳編』(1729)－ 『正音彙編』(1820)

(b)『正音撮要』(1834)

(c) 『正音辨微』(1837)－ 『正音咀華』(1853)－ 『正音咀華續編』(1853)－ 『正音再華傍注』(1867)

【福建系】

(a)官音彙解釋義音註(1748)－官音彙解便覽(1794)－官音仕途必需雅俗便覽(1862)

(b)正音通俗表(1870)

狭義の正音資料はもともと、使用地域の話者による使用を前提としていた。利用者を方言話者に特化した資料、つまり「官話」語彙と方言語彙を対照して記した資料は、広東系(a)と福建系(a)、および傍注形式で方言音を介して官話音に導くタイプの『正音咀華』塵談軒本と『正音再華傍注』である。なかでも袁

一州『官語詳編』は稀覯本に属し[32]、その他の資料も『正音撮要』以外は、所蔵が極めて限られている。これは利用者を限定した形式であることが原因であろう。

それ以外は、利用者の属性を問わない資料である。正音資料のなかでとりわけ多く流通しているのは『正音撮要』と傍注を付さない『正音咀華』であるが、これらが利用者の地域性を問わないことが、かえって後に広く利用される理由であったと考えられる。

3.2 正音資料の種類

正音資料を内容面から分類すると、以下のようになる。発音のみの資料は、欽定となったものを含む。単文を含むものは最初期の広東系と福建系を含み、「官話文」を掲載した正音資料は広東系に限られる。

仮に、18 世紀の正音書を前期とし、19 世紀のそれを後期とするなら、前期は押韻規範の色彩が残るものや、南京の発音を目指したものが多いのに対し、後期は北京語を反映するものが出てくる。例えば、塵談軒刊本『正音咀華』は、本文で入声が存在する音系を標榜しつつも、傍注で北音の再現を目指している[33]。

【発音のみ】

『正音切韻指掌』、『正音通俗表』、『正音新纂』

【発音＋語彙＋単文】

『官語詳編』、『正音彙編』、『官音彙解釋義音註』、『官音彙解便覧』、『官音使途必需雅俗便覧』

【発音＋官話文】

『正音撮要』、『正音辨微』、『正音咀華』、『正音再華』

---

32 高田時雄(1997)に引用がある。該書がロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク支部所蔵されていることは内田慶市教授のご教示による。

33 石崎博志(1997)参照。

3.3 福建系正音資料と琉球系官話資料にみる共通性

テキスト本文の発音を直音の傍注で示す方法は、明代から行われてきた。これは清代にも継承され、正音資料にもみられる。この点は福建系、広東系ともに共通している。例えば、乾隆十三年(1748)刊の蔡爽『新刻官音彙解釋義音註』や咸豐 3 年(1853) 『正音咀華』の塵談軒刊本にも傍注が使われているが、これらはテキストの利用者がのちに手書きで加えたものではなく、予め版木に刻まれたものを、本文に重ねて印刷している。このことは、傍注が記された箇所において版本の匡郭(版匡)や界線が途切れていることから確かめられる。

例えば、上記の『新刻官音彙解釋義音註』の第六葉、本文の“正飲酒吃酒”の“飲”(中古沁韻)に対して傍注“引”(中古震韻)が付されている例がある。これは福建方言話者が本文“飲”を両唇鼻音韻尾[m]に誤読してしまうことを避けるため、方言音で“引”を読むことで“飲”を歯茎鼻音韻尾[n]で発音させることを意図した注である[34]。

実はこれと同じ注が琉球の官話課本の一つ、天理大学本『官話問答便語』[35]にもみられる。ここにも本文の“飲”に対して傍注で“引”が記されている。さらに同書には本文“轟”(中古曉母)に対して傍注“奉”(中古奉母)を使って注音する例もみられる。この傍注が正しく成り立つためには、“奉”を喉音で読む地域が該当する。“飲：引”、“轟：奉”の例を併せると、『官話問答便語』の音注は、福建の方言に基づいている例も含まれていることが分かる[36]。

では、この福建系正音資料と琉球系官話資料の共通性は何を物語るのであろうか。『新刻官音彙解釋義音註』が法政大学沖縄文化研究所に所蔵されていることから、こうした傍注が琉球人の手によって付された可能性も皆無ではない。だが、琉球では版木を使用して課本を印刷した事実が存在しないことから、『新刻官音彙解釋義音註』の傍注は、漢人の手によって漢人のために印刷されたとみるのが妥当であろう。また、『官話問答便語』における m 音を n 音に読ませ

---

34 その他本文の両唇鼻音韻尾に対して舌音韻尾の傍注を使う例は、南(覃韻)：難(寒韻)、監(陷韻)：堅(先韻)、鉗(鹽韻)：乾(寒韻)などがある。
35 瀬戸口律子(2005)影印箇所参照。
36 福島千秋(2013)「『琉球官話課本』の音注について」沖縄文化協会 2013 年度研究発表会要旨

る意図をもった注は、琉球人の利用者を想定しているとは考えにくい。やはり『官話問答便語』が琉球人によって使用されたのみならず、福建の漢人にも使用されたことを示すものと考える。これは謝家、鄭家、馮家といった主な土通事(琉中交流における中国側通訳)がいずれも福州の出身で、通事職を世襲的に継承していた歴史的事実とも符合する[37]。

福建系の正音資料には、広東系のような対話形式の課本や官話文を掲載した資料が存在せず、琉球の官話課本が福建人の官話学習を補完した可能性も考えられる。

おわりに：漢人の官話学習

正音資料は当初、福建、広東の地域にのみ使われていたと思われる。20 世紀になり『正音撮要』が上海で、『正音咀華』が日本の名古屋でも発行される。また現存資料の所蔵をみると、正音資料が琉球や欧州に拡散していった様子がうかがえる。内容面においても『正音撮要』が日本の官話学習書『官話指南』などにも転用され[38]、Thom, Robert (1846)の官話学習書[39]にも掲載されるなど、正音資料が外国人の編纂による漢語教科書に利用されている状況が報告されている。しかし、『正音撮要』や『正音咀華』を除く、多くの正音資料はいずれも稀覯書に属し、特に 18 世紀に発行された正音資料は、官話学習にどの程度効果があったのか、疑わしいと言わざるを得ない。

一方、琉球人向けに書かれた官話資料が福建人によって利用された形跡があることはすでに述べた。この考えを敷衍するなら、琉球版『人中画』[40]も同様に漢人によって使用された可能性も生じる。白話文体で書かれた『人中画』が、琉球版に「翻訳」される過程で漢人が関与したことが十分に考えられるが、大部な内容の「翻訳」と一字一句漏らさずに正確に声調の圏点を付す行為が、琉球人のためのみに行われたのだろうか。琉球版『人中画』の欄外に漢語の注が

---

37 西里喜行(2002)参照。
38 氷野善寛(2010)参照。
39 Thom, Robert (1846)。
40 木津祐子(2013)参照。

書き込まれている意味を、どのように考えるのか。今後は正音資料の存在を利用者側の視点でとらえなおす必要がある。

福建や広東以外の地域で、正音資料に相当する資料がほぼ皆無であることが何を意味するのか。平田昌司(1996)では以下のように述べる。

「音韻面では共通語との対応規則を求めやすい「文読」、語彙・文法面では文語的表現、この二つを利用することで、正規の官話を学習することなしにとりあえずの意思疎通をはかれたと考えられる。(中略)歴史上文献に出現する「官話」とは、「金陵・洛下」にあたる大都市の発音や語彙・文法を手本とした共通語のみをさすものではなく、できる限り文章語に近づけられた方言をも含んだとするのが自然であろう」。

すでに文章語を身につけた漢人が、読書音を変更する(音を正す)ことで、「官話」を話すという行為は、根本的に漢語を母語としない者の官話学習とは全く質が異なる。漢人の官話学習に迫るとき、域外資料とは異なったアプローチが必要となろう。

参考文献

王力(1926)「濁音上聲變化說」『廣西留京學會学報』1927(4);(1991)『王力文集』済南:山東教育出版社,18:399-419.

周祖謨(1956)「普通話的正音問題」『中國語文』47:24-27.

高名凱・劉正埮(1956)「語音規範化和漢字正音問題」『新建設』1956(3):25-32.

王利器(1979)「《紅樓夢》是學習官話的教科書」『紅樓夢學刊』1979(1).

福建省戯曲研究所(1983)『福建戯史録』福建:福建人民出版社.

耿振生(1992)『明清等韻學通論』北京:語文出版社.

陳谷嘉(1997)『中国書院制度研究』浙江:浙江教育出版社.

葉寶奎(2001)『明清官話音系』厦門:厦門大学出版社.

廖振旺(2008)「萬歲爺意思説　試論十九世紀来華新教傳教士對『聖諭廣訓』的出版與認識」『漢學研究』26(3):225-262.

劉懐堂(2009)『正字戯研究』中山大学出版社.

朴在淵(2010)「関于朝鮮后期抄本漢語会話書華峯文庫《中華正音》」『国際漢学研究通訊』2:42-71.

안기섭(2004)「清代官話音系研究」『中國學研究』29:463-526.

王維輝(2010)「≪高麗史≫和≪李朝實録≫中的漢語研究資料」嚴翼相・遠藤光暁主編『韓漢語語言探索』119-162 首爾:學古房.および『漢語史學報』9:221-242.上海:上海教育出版社.

石崎博志(1997)「「正音咀華」音韻体系の二重性」『中國語學』244:171-180.

太田辰夫(1969)「言語政策」光生館『中国語学新辞典』:187.

片山兵衛(1978)「清代閩粤地方の正音教育について—雍正朝を中心に」『中央大學アジア史研究』2:51-73.

木津祐子(2008a)「「官話」文體と「教訓」の言語ー琉球官話課本と『聖諭』をめぐってー」『吉田富夫教授退休記念論集』449-462.東京:汲古書院.

木津祐子(2008b)「琉球的官話課本"官話"文體與"教訓"言語」『域外漢籍研究集刊』17-33.

木津祐子(2013)『京都大学文学研究科蔵琉球写本『人中畫』四巻付『白姓』』臨川書店.

瀬戸口律子(2005)『官話問答便語全訳:琉球官話課本研究』榕樹書林.

更科慎一(2005)「19 世紀末朝鮮の北方漢語資料『華音撮要』の研究—ハングル音注を中心に—」山口大学『アジアの歴史と文化』9:63-103.

高田時雄(1997)「清代官話の資料について」『東方學會創立五十周年記念東方學論集』771-784.

高田時雄(2007)「搖籃時代的歐洲漢語課本」第2回世界漢語教育史研究学会『16-19世紀西方人的漢語研究』大阪：関西大学.

竹越孝(2009)「阿川文庫蔵『中華正音』翻字(1)-(8)」古代文字資料館発行『KOTONOHA』74-81.

竹越孝(2013)「朝鮮資料に見られる"官話"—その認識の変遷をめぐって—」,『太田斎・古屋昭弘両教授遍歴記念中国語学論集』, 東京:好文出版 164-174.

竹越孝(2013)「『清文啓蒙・兼漢滿洲套話』のテキストとその受容」(未刊).

中村雅之(2010)「清代の反切について」古代文字資料館発行『KOTONOHA』96:1-2.

西里喜行(2002)「土通事・謝必振とその後裔たち：中琉交渉史の一側面」『琉球大学教育学部紀要』60(25-42).

氷野善寛(2010)「『官話指南』の多様性-中國語教材から國語教材」『東アジア文化交渉研究』3:237-259.

平田昌司(1997)「徽州休寧の言語生活」『未名』14(1-32).

平田昌司(2001)「制度化される清代官話—科舉制度と中國語史第八—」『明清時代の音韻學』31-60.京都大學人文科學研究所.

福島千秋(2013)「『琉球官話課本』の音注について」沖縄文化協会 2013 年度研究発表会要旨

望月郁子(1990)「観智院本「類聚名義抄」の正音注-同音字注における図書寮本との一致を中心に」静岡大学人文学部『人文論集』41:77-96.

渡辺修(1969)「類聚名義抄の呉音の性格」『大妻女子大学文学部紀要』1:37-44.

Jurien, Stanislas(1863)『日常口頭話』*Ji-Tch'ang-K'eou-T'eou-Hoa: Dialogues chinois à l'usage de l'école spéciale des langues orientales vivantes*. Paris: Librairie orientale de Benjamin Duprat.

Thom, Robert(1846) *The Chinese speaker, or Extracts from works written in the Mandarin language, as spoken at Peking. Compiled for the use of students*, Esq., H. M. Consul at Ningpo. Part I. Ningpo: Presbyterian Mission Press. Chinese t.p. (正音撮要上卷,大清靜亭高氏纂輯,大英羅伯聃譯述,寧波華花　聖經書房藏珍).

Wade, Thomas(1867)『語言自邇集』*a progressive course designed to as sist the student of colloquial Chinese, as spoken in the capital and the metoropolitan department, in eight parts, with key, syllabary, and writing exercises*:1st. London :Trübner.

正音資料目録

1. 總論

黎錦熙(1934)『國語運動史稿』商務印書館.

永島榮一郎(1941)「近世支那語特に北方語系統に於ける音韻史研究資料に就いて(續)」日本言語學會『言語研究』9.

太田辰夫(1951)「清代北京語語法研究の資料について」『神戸外大論叢』2(1):13-30.

佚名(1961)「最早的北京語音訓練班—清代的正音書院(小資料)」『文字改革』1961(12):9.

太田辰夫(1969)「言語政策」『中國語學新辞典』:187. 東京：光生館

片山兵衛(1978)「清代閩粤地方の正音教育について—雍正朝を中心に」『中央大學　アジア史研究』2:51-73.

李新魁, 麦耘(1993)『韻學古籍述要』西安:陝西人民出版社.

侯精一(1980)「清人正音書三種」『中國語文』1980(1):64-68.

呂朋林(1986)「清代官話讀本研究」『古籍整理研究學刊』1986(3):55-63.

王利器(1979)「『紅樓夢』是學習官話的教科書」『紅樓夢學刊』1979(1):163-168.

耿振生(1992)『明清等韻學通論』北京：語文出版社.

平田昌司(1994)「制度化される清代官話—科擧制度と中國語史第八—」高田時雄『中國語史の資料と方法』京都：京都大學人文科學研究所, 31-60.

鄧洪波(1994)「正音書院與清代的官話運動」『華東師範大學學報(教育科學版)』3:79-86.

史鑒(1995)「清代的語音規範」『語文建設』1995(12):43-44.

李如龍(1995)「閩南方言地区的語言生活」『語文研究』1995(2):34-37.

高田時雄(1997)「清代官話の資料について」『東方學會創立五十周年記念東方學論集』東京：東方學會,771-784.

張衛東(1998)「北京音何時成為漢語官話官標準音」『深圳大學學報(人文社會科學版)』1998(4):93-98.

李如龍(1999)「閩粤方言的不同文化特征」『暨南學報(哲學社會科學)』21(6):4-10

張玉来(1999)「近代漢語官話韻書音系複雜性成因分析」『山東師大學報(社會科學

版)』1999(1):77-80+85.
平田昌司(2000)「清代鴻臚寺正音考」『中國語文』2000(6):537-544.
楊文信(2000)「試論雍正、乾隆間廣東的“正音運動”及其影響」單周堯　陸鏡光　主編『第七屆國際粵方言研討會論文集　方言增刊』北京:商務印書館,118-136.
葉寶奎(2000)「関于漢語近代音的几个問題」『古漢語研究』2000(3):14-18.
葉寶奎(2001)『明清官話音系』厦门大學出版社.
葉寶奎(2001)「試論《書文音義便考私編》音系的性質」『古漢語研究』2001(3):6-10.
樋口靖(2002)「本学所蔵明清時代等韻書」『知の泉 Castalia』2:13-15.
銭奠香・李如龍(2002)「論閩台両省方言和文化的共同特点」『語言文字應用』2002(2):27-35.
村田雄二郎(2003)「清代の正音教育と雍正帝」『Odysseus: 東京大學大學院總合文化研究科地域文化研究專攻紀要』8:52-69.
李國華(2004)「《切韻正音経緯圖》語音演変分析」『雲南民族大學學報(哲學社會科學版)』2004(2):123-125.
郝天曉(2005)「《正音捃言》研究」吉林大學修士論文
岩田憲幸(2006)「《新定考正音韻大全》音節總表」『龍谷紀要』28(1):43-63.
岩田憲幸(2007)「《新定考正音韻大全》同音字表(上)」『龍谷紀要』28(2):75-95.
岩田憲幸(2007)「《新定考正音韻大全》同音字表(中)」『龍谷紀要』29(1):175-203.
黎新第(2003)「明清官話語音及其基礎方音的定性與檢測」『語言科學』2003(1):51-59.
耿振生(2007)「再談近代官話的“標準音”」『古漢語研究』2007(1):16-22.
甯忌浮(2009)「王荔《正音捃言》」『漢語韻書史』上海:上海人民出版社.
呉永斌(2008)「試析雍乾年間的官話運動」『民族教育研究』2008(2):113-116.
岩田憲幸(2009)「《新定考正音韻大全》同音字表(下)」『龍谷紀要』31(1):17-40.
吴春玲(2009)「清代及民國時期普通話的推廣」『教育評論』2009(5):152-155.
陳輝(2011)「泰西、海東文献所見洪武韵以及明清官話」『浙江社會科學』2011(1):128-134+159.
張玉来(2010)「明清時代漢語官話的社會使用状况」『語言教學與研究』

2010(1):88-94.

陳令申(2011)「雍正推行“普通話”」『幸福(悦讀)』2011(1):5、のち晩報文萃 2011(11).

金銀珍(2011)「清初福建正音書院品論——以閩北正音書院為为例」『新鄉學院學報(社會科學版)』2011(1):70-73.

黄易青(2012)「古音研究中的“以義正音”」北京師範大學學報(社會科學版)』2012(4):37-43.

石崎博志(2014)「正音資料の特質」『日本東洋文化論集』20 号

2.1 袁一州『官語詳編』　広東系

◎原始資料

雍正七年【1729】刊本：袁一州『官語詳編』一卷;ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク(SPbF IVRAN)所蔵.

◎研究

高田時雄(1997)「清代官話の資料について」『東方學會創立五十周年記念東方學論集』東京：東方學會,771-784.

2.2 張玉成『別俗正音彙編大全』　広東系

◎原始資料

清乾隆 50 年【1785】序刊本、張玉成『別俗正音彙編大全』二卷.

清嘉慶 25 年【1820】上巻醉經樓書林刊本, 下巻一貫堂書林刊本;Biblioteca nazionale centrale di Roma.Roma. Fondo Vittorio Emanuele. (関西大學のデータベースにあり).

清嘉慶 25 年【1820】一貫堂書林刊本『南北官話彙編大全』卷下板心題名「正音彙編」、封面題名「南北官話彙編大全」：University of Oxford Bodleian Libraries(268.87, Sinica165).

◎研究

高田時雄(1997)「清代官話の資料について」『東方學會創立五十周年記念東方學論集』東京：東方學會,771-784.

高田時雄(2001)「トマス・ウェイドと北京語の勝利」『シンポジウム西洋近代と

中國』京都：京都大學學術出版會.

2.3 蔡奭『新刻官音彙解釋義音註』(注釋官音彙解) 福建系

乾隆 13 年【1748】蔡奭"題識" 龍江書屋. 新刻官音彙解釋義/ 蔡奭纂著. 註釋官音彙解.

法政大學沖縄文化研究所楚南家文書;台湾中央図書館台湾分館;大塚秀明氏蔵書; Library of Yale, SML East Asia Library Special Collections. Call Number:Fv5154 4948.

◎研究

木津祐子(2001)「『新刻官話彙解釋義音註』から『新刻官話彙解便覽』へ—併せて『新刻官話彙解便覽』音系の特徴について—」高田時雄『中國語史の資料と方法』京都：京都大學人文科學研究所,65-88.

2.4 新刻官音彙解便覽(新刻官話彙解便覽) 福建系

◎原始資料

大英圖書館;國立國會圖書館(179-33);法政大學沖縄文化研究所楚南家文書【上巻】.

清乾隆歳次甲寅(1794)孟冬穀旦浣手書 大英図書館蔵

影印：長澤規矩也(1974)『明清俗語辞書集成』第三巻,東京：汲古書院.

◎研究

林慶熙(1983)『福建戯史録』福州：福建人民出版社.

Van der Loon, Piat(1992) *The Classical Theater and Art Song of South Fukien*, Taipei :SMC Publishing Inc, note61.

木津祐子(2000)「『新刻官話彙解便覽』的音系初探」『中國音韻學會第十一届學術討論會 漢語音韻學第六届國際學術研討會論文集』254-60.

木津祐子(2001)「『新刻官話彙解釋義音註』から『新刻官話彙解便覽』へ—併せて『新刻官話彙解便覽』音系の特徴について—」高田時雄『中國語史の資料と方法』京都：京都大學人文科學研究所,65-88.

2.5 張錫捷　『較正官音仕途必需雅俗便覧』　福建系

◎原始資料

法政大學沖縄文化研究所楚南家文書.

清乾隆 16 年【1751】刻本:國家(字 158/8432【8 冊】);中科院(經 933 134 2993725-32)

影印：(1997)『四庫全書存目叢書』(經部第 219-220 冊)台南

清同治【1862】中泉郡輔仁堂刊本: 較正官音仕途必需雅俗便覧 ： 三卷 / (清)張錫捷撰 、清同治中泉郡輔仁堂刊本、封面、版心題名「官音便覧」,University of Oxford Bodleian Libraries(Sinica 4890).

◎研究

許長安等(1993)「第五章早期學習“官話”活動在厦門」許長安・李熙泰『厦門話文』厦門：鷺江出版社.

木津祐子(2001)「『新刻官話彙解釋義音註』から『新刻官話彙解便覧』へ—併せて『新刻官話彙解便覧』音系の特徴について—」高田時雄『中國語史の資料と方法』京都：京都大學人文科學研究所,65-88.

丁媛(2013)「《(新刻) 官話彙解便覧》“正音”研究」, 浙江財經学院碩士論文.

2.6 高靜亭『正音撮要』　広東系

◎原始資料

清道光 14 年【1834】高靜亭『正音撮要』學華齋刊本:關大(L23/A/2674-2677); 東外大(CII/2750)【4 冊】《明清俗語辞書集成》と蒋致遠主編《中國方言謡諺全集》第十五巻周商夫編輯的《正音撮要》。巻二、巻三のみ収録。:新潟大學佐野文庫蔵.

清道光 26 年【1846】The Chinese speaker, or Extracts from works written in the Mandarin language, as spoken at Peking. Compiled for the use of students, by Robert Thom, Esq., H. M. Consul at Ningpo. Part I. Ningpo: Presbyterian Mission Press. Chinese t.p. (正音撮要上卷,大清靜亭高氏纂輯,大英羅伯聃譯述,寧波華花聖經書房藏珍). The Royal University Library(Oslo, Norway):Hs56;東洋(貴重書 III-12-F-c-5)

清咸豐 2 年【1852】本：上海圖書館.

清咸豐 8 年【1858】連元閣藏刊 :『正音提要』三卷, 高靜亭撰:國會 東京 180-117. 國會 東京

清咸豐 10 年【1860】: 學華齋刊本:東大東文(倉石 10603)【4 冊】;國會 東京 172-37. 外山友善刊:都立中央(中特 6574)【4 冊】.

清同治 4 年【1865】The Chinese speaker, or, Extracts from works written in the Mandarin language, as spoken at Peking."CANTON CUSTOMS PRESS": 北京大學圖書館.東洋(貴重書 P-III-a-1302)

清同治 6 年【1867】□□堂藏板 : 廣州中山大學圖書館四册全, 廣州中山圖書館存卷一と卷四。虫食い顕著。

光緒 31 年【1905】麟書閣本:廣州中山圖書館.

光緒 32 年【1906】廣州十八甫時雅書局石印評点本: 廣州中山圖書館.

光緒 33 年【1907】福藝樓本 : 廣州中山圖書館.虫食いが甚だしい。

光緒 33 年【1907】粤東卒英齋朱批本:《朱批正音撮要》:北京大學圖書館.

明國 9 年【1920】錦章石印本 "上海錦章圖書局發行"。廣州中山圖書館.

影印:蔣致遠編(1985)『中國方言謡言全集』臺北:宗青圖書出版公司.

影印:長澤規矩也編(1974)『明清俗語辭書集成』第三輯,東京:汲古書院.

◎研究

李新魁, 麦耘(1993)『韻學古籍述要』陝西人民出版社, 391.

内田慶市(1999)「イソップ東漸-ロバート・トームと『意拾喩言』」『関西大学文学論集』49(1):1-37.

麦耘(2000)「《正音撮要》中尖団音的分合」『古漢語研究』2000(1):31-34.

王為民(2000)「《正音撮要》作者里籍與版本考論」『古籍整理研究學刊』

樋口靖(2002)「本学所蔵明清時代等韻書」『知の泉 Castalia』2:13-15.

高岸晃夫(2009)「『正音撮要』札記」『千里山文學論集』81:77-100.

氷野善寛(2011)「『官話指南』の来歴の一端-『正音撮要』との関係について」『関西大學中國文學會紀要』32:43-71.

2.7 莎彝尊『正音辨微』　広東系

◎原始資料

道光 17 年【1837】文選樓？刊本：莎彝尊『正音辨微』六卷.

◎研究

高田時雄(1997)「清代官話の資料について」『東方學會創立五十周年記念東方學論集』東京：東方學會,771-784.

2.8 莎彝尊『正音咀華』　広東系

◎原始資料

咸豐 3 年【1853】雙門底聚文堂刊本：正音咀華三卷 並正音咀華續篇一卷, 莎彝尊著：東京都立中央(市村 821-IW-27);佛大(494590,494591); 関大泊園(LH2/1.10-48);東外大諸岡(II/161【2 冊】); 京産大小川(經 317【1 冊】);上海(線普長 286721-22).

咸豐 3 年【1853】廣州：塵談軒刊本:國家(XD8242【2 冊】, 字 150/887.1【2 冊】, 字 150/887【2 冊】);人大(PG112/56【2 冊】);首都((G)己/1042).

同治 3 年【1864】刊本:東大東文(倉石 10604【2 冊】).

宣統 2 年【1910】重刊麟書閣蔵版:傅斯年(424.5 410-06).

宣統 2 年【1910】石印本：上海(線普 490530)

影印：昭和 46 年【1971】：名古屋采華書林 咸豐三年維經堂刊本,正音咀華三卷, 景印:京大人文研 東方.

縮微品:(1993)北京：全國図書館文献縮微中心.

◎研究

黎錦熙≪國語運動史稿≫p.27

太田辰夫(1951)「清代北京語語法研究の資料について」『神戸外大論叢』2(1):13-30.

侯精一(1962)「百年前的廣東人學“官話”手册《正音咀華》」『語文建設』1962(12).

佐藤晴彦(1973 年)「《正音咀華》のことば--近世白話史の一資料」大阪市立大學文學部『人文研究』25(3): 54-69.

侯精一(1980)「清人正音書三種」『中國語文』1980(1):64-68.

耿振生(1992)『明清等韻學通論』北京：語文出版社.

李新魁, 麦耘(1993)『韻學古籍述要』:392, 陝西:陝西人民出版社.
岩田憲幸(1994)「清代後期の官話音」高田時雄『中國語史の資料と方法』京都：京都大學人文科學研究所.
羅偉豪(1995)「評≪正音咀華≫-兼論一百五十年前的廣州話」『語言研究增刊』333-339.
石崎博志(1997)「「正音咀華」音韻体系の二重性」『中國語學』244：171-180.
樋口靖(2002)「本学所蔵明清時代等韻書」『知の泉 Castalia』2:13-15.
陳瓊琪(2000)《「正音咀華」研究》國立中山大學中國文學研究所碩士論文.
葉寶奎(2001)『明清官話音系』厦门:厦门大學出版社.

2.9 莎彝尊『正音切韻指掌』　欽定(広東系？)

◎原始資料

正音切韻指掌一卷、續修四庫全書 第258册:東洋文庫(V-5-C-233).

◎研究

永島榮一郎(1941)「近世支那語特に北方語系統に於ける音韻史研究資料に就いて(續)」日本言語學會『言語研究』9.
侯精一(1980)「清人正音書三種」『中國語文』1980(1):64-68.
馮蒸(1990)「関于《正音切韻指掌》的幾箇問題」『漢字文化』1990(1):24-40.
馮蒸(1991)「《正音切韻指掌》再探(1)」《漢字漢語學術研討會論文集》下,吉林：吉林教育出版社,153—176.
耿振生(1992)『明清等韻學通論』北京：語文出版社.
李新魁, 麦耘(1993)『韻學古籍述要』陝西：陝西人民出版社, 394.
岩田憲幸(1994)「音韻資料をあつかうことのむづかしさ—『正音切韻指掌』を例にして—」高田時雄『中國語史の資料と方法』京都：京都大學人文科學研究所,61-64.
馮蒸(1996)「≪正音切韻指掌≫再探(2)」『古漢語研究』(第一輯),北京：中華書局, 1996年, 331-347.
石崎博志(1998)「『正音切韻指掌』と『正音再華傍註』ー編者・莎彝尊の正音観」『日本東洋文化論集』4：57-78.

岩田憲幸(2005)「論≪正音切韻指掌≫音系」『龍谷紀要』27(1):53-68.
馮蒸(2006)『馮蒸音韻論集』學苑出版社.

2.10 莎彝尊『正音再華傍注』

◎原始資料

同治 6 年【1867】塵談軒刊本:國家(字 150/877-2【2 冊】)

◎研究

侯精一(1980)「清人正音書三種」『中國語文』1980(1):64-68.
高田時雄(1997)「清代官話の資料について」『東方學會創立五十周年記念東方學論集』東京：東方學會,771-784.
石崎博志(1998)「『正音切韻指掌』と『正音再華傍註』－編者・莎彝尊の正音観」『日本東洋文化論集』4：57-78.

2.11 莎彝尊『紅楼夢摘華』

◎原始資料

同治 7 年【1868】
光緒 7 年【1881】塵談軒【1 冊】：酒田市立光丘文庫(403).

◎研究

王利器(1986)「『紅樓夢』是學習官話的教科書」『耐雪堂集』, 北京：中國社會科學出版社.

2.12 李汝珍『李氏音鑑』

◎原始資料

寶善堂刊本:京大人情セ(經 X-4-52)【4 冊】.
同治七年【1868】木樨山房再修本:東大總(D40-639); 京大人情セ(經 X-4-53); 佛大(496039～496042); 筑大(チ 530-455)【4 冊】.
同治九年【1888】掃葉山房刊本:京大中哲文;立大高木;東外大諸岡(II/8)【4 冊】.
清末刊本:東大總(D40-621)【1 冊】;神戸市外大(經部 10-228-1～4)【4 冊】.

◎研究

楊自翔(1987)「《李氏音鑑》所反映的北京語音系統」『語言研究論叢』4:14-60.

楊亦鳴(1989)「《李氏音鑑》音系的性質」『語言研究』2:82-94.

楊亦鳴(1990)「《李氏音鑑》的粗細理論及反切特點」『徐州師範學院學報(哲學社會科學)』1:165-172.

蔡瑛純(1990)「「李氏音鑑」의音系研究」『人文科學研究所論文集』16:193-237.

楊亦鳴(1991)「《李氏音鑑》與十八世紀末的北京音系」『語言研究增刊□語音的研究』:108-114;徐州師範學院中文系編(1992)『漢語研究論集』1:102-114.

楊亦鳴(1991)「《李氏音鑑》的聲、韻、調系統」『徐州師範學院學報(哲學社會科學)』3:82-89.

楊亦鳴(1992)『《李氏音鑑》音系研究』陝西人民教育出版社.

徐復(1995)「《李氏音鑑音系研究》述評」『徐州師範學院學報(哲學社會科學)』1:143,157.

陳盈如(1996)「論嘉慶本《李氏音鑑》及相關之版本問題」『聲韻論叢』5:215-246.

王爲民·江火(2000)「非線性音系學與《李氏音鑑》的反切原理」『中國音韻學研究會第十一屆學術討論會暨漢語音韻學第六屆國際學術研討會論文集』397-402.

王爲民(2008)「非線性音系學與《李氏音鑑》的反切原理」『南京社會科學』8:131-135.

陳雪竹(2008)「《李氏音鑑》音系中'博盤滿粉'四母字的介音」『語言教學與研究』3:92-96.

2.13 潘逢禧『正音通俗表』　福建(閩東)系

◎原始資料

同治 9 年【1870】刊本：潘逢禧『正音通俗表』一册:東大東文(倉石 10605);中科学院(經 933062);國家(字 150/883)

◎研究

侯精一(1980)「清人正音書三種」『中國語文』1980(1):64-68.

李新魁, 麦耘(1993)『韻學古籍述要』陝西人民出版社:394-395.

岩田憲幸(1994)「『正音通俗表』の韻母体系」『龍谷紀要』15(2):155-162.

岩田憲幸(1994)「「正音通俗表」の声母体系」『龍谷紀要』16(1): 73-77.

岩田憲幸(1995)「《正音通俗表》音系的特徴」『龍谷紀要』17(1):101-105.
高田時雄(1997)「清代官話の資料について」『東方學會創立五十周年記念東方學論集』東京：東方學會,771-784.
葉寶奎(2001)『明清官話音系』厦门大學出版社.
葉寶奎(2001)「浅談的語音観念」『厦門廣播電視大學學報(綜合版)』2001(1).
銭奠香・李如龍(2002)「論閩台両省方言和文化的共同特点」『語言文字應用』2002(2).

2.14 潘逢禧『正音通俗表摘要』

◎原始資料

同治 9 年【1870】逸香齋刊本:『正音通俗表』一册:中科学院(經 933 238 2997683-4); 國家(字 150/883)

2.15 江寧馬『正音新纂』

◎原始資料

光緒 25 年【1899】江寧馬氏自序:『正音新纂』二卷,清 馬鳴鶴 撰:神外大 經部-小學類-45.
光緒 28 年【1902】金陵状元境宜春文閣刊本.

◎研究

孫華先(2005)「《正音新纂》: 清末對外漢語教師描写的南京官音」全國漢語方言學會第十三届年會暨漢語方言國際學術研討會.2005 年 9 月.
孫華先(2008)「趙元任≪南京音系≫研讀」『語文研究』2008(1):49-53.